# Ⅱ　史跡旧跡編

江戸を発って保土ヶ谷宿を過ぎ権太坂を登り境木を抜けると、私たちの住む旧川上地区に入ります。この地区は、戸塚宿ほどの繁栄はしませんでしたが、東海道に面し、交通の要衝として江戸時代から栄えました。また柏尾の不動坂にある追分不動尊から東海道を右にそれ、大山道を辿り雨降りの神様大山阿夫利神社への柏尾道も始まる関係で何軒かの旅籠があったとの事であります。

また近年では、ＪＲ東戸塚駅の開業により飛躍的に発展を続ける東戸塚地区は、戸塚区の新しい街づくりの典型的な様相を呈しています。

この編では、こうした新旧の側面を持つ旧川上地区の史跡旧跡に焦点を当て、「とつか歴史ロマン」新装版（平成２７年戸塚区役所発行）を参照しつつ、神社仏閣の紹介を始め、各種遺構なども取り上げてみました。

本編が、この地域を新たに見直すきっかけになれば幸いです。

## １．平戸・平戸平和台地区

### （１）境木立場跡と焼き餅坂（別名牡丹餅坂）

当初、馬立場（昔の郵便、伝馬等の休息中継所）として発達したが、参勤交代、大山阿夫利神社詣、江ノ島神社弁財天詣の道中にあるなど、往来が繁くなるにつれて数軒の茶屋ができ、江戸末期にはそれが旅籠の役割を果たすようになった。北斎・広重・春景・芳艶の境木立場の図にも当時の繁盛ぶりがよく描かれている。

明治天皇が東幸[明治元年(1868)１０月１１日]還幸［明治元年１２月８日］及び再東幸［明治２年(1869)３月２８日]の際ご小休された若林家邸内に、「御東幸御小休所跡」の説明板がある。

焼き餅坂の看板
品濃町１８３５－６

焼き餅坂は境木地蔵から戸塚に向かってすぐの切り通しの坂である。江戸時代のこの辺りには、古着屋、醤油屋、背負い屋、かご屋、らお屋（煙管掃除屋）、餅屋、鍛冶屋、下駄屋、そうめん屋、とうふ屋などを生業にしていた人達が多く住んでいたという。

境木立場の「焼き餅」（別名牡丹餅）は当時街道の名物としていろいろな旅行記古文書を賑やかしている。（貝原益軒の東海道下り・浅井了意の東海道名所記・鎌倉日記・甲申旅日記・東海道中膝栗毛・その他数々）そこから坂の名になったという。

### （２）境木地蔵尊（保土ケ谷区境木本町 2-17）

境木地蔵尊は境木立場跡の戸塚側にある。正しくは一応山良翁院境木延命地蔵尊という。身の丈五尺の地蔵尊はその昔、鎌倉の由比ヶ浜に打ち上げられたが、再び波にさらわれ押し流されて腰越海岸に打ち上がった。手厚く奉られた地蔵尊が漁師達の夢に現れ江戸に行きたいという、そこで牛車に乗せて運んできたが境木の地で動かなくなった。夢のご託宣のとおり､漁師達は地元の助けを得てそこに安置した。すると今度は、境木の人たちの夢の中に現れ、どんなでも良いから雨露をしのぐお堂を建ててくれ、礼としてこの地を繁盛させてやる。というのでお告げのとおりお堂を建ててお奉りしたのだという。

境木地蔵尊

堂内には石の地蔵像［万治２年(1659)］がある。境内には境木大欅（推定樹齢６５０年）があり、石段左手の石灯籠の竿石には荻原井泉水筆の「明々」の文字が刻まれている。井泉水は昭和５年に当地を吟行し「拾ふて拾ふて地蔵様の落ちる葉」の句を残し

た。堂前には武蔵国・相模国の境界杭が立てられていたので、これを境木と呼びそれが地名となった。

### （３）萩原代官屋敷跡（平戸 3-54-1）

江戸時代この地一帯（戸塚側）は旗本杉浦越前守の直轄地であった。代々家臣の萩原家は、相州鎌倉郡代官として、平戸・下永谷・本郷・豊田・中田・舞岡・柏尾一帯を治めていたが、東海道の街道取り締まりも兼ねていたようである。

萩原代官屋敷跡

萩原太郎藤原之行篤［文政元年(1818)～明治３７年(1904)］は、嘉永４年(1851)江戸にて直心影流免許皆伝を得た文武両道の士で、維新（明治）以降は鎌倉郡代・神奈川県会議員などを歴任した。

代官時代、屋敷内に相州萩原道場を開き、全国から数多くの剣豪が訪れた。萩原家所蔵の「剣客名」には、安政５年(1858)８月、天然理心流近藤勇（後新撰組局長）の名が記され、慶応２年(1866)９月までの入門者総数２２５名に達したと言われる。

現在の戸塚区・保土ケ谷区･鎌倉市から三浦市にかけて、また平塚市･茅ヶ崎市･寒川町等の広範囲にわたり門弟のため出稽古を行っていた。

明治４５年(1912)、少し離れた敷地に「剣道師範萩原君碑」が建立された。

### （４）投げ込み塚

旧東海道を保土ヶ谷から戸塚へ向かい権太坂の一番坂・二番坂の急な坂を登り切ると、やや緩やかになりその左手に投げ込み穴があった。権太坂は箱根に次ぐといわれた難所であったから、行き倒れの旅人や疲労で動けなくなった牛馬も多く、投げ捨てるように埋めた所として知られている。

投げ込み塚

昭和１６年の権太坂の改修工事や昭和３６年の宅地造成期に出てきた多数の白骨を平戸町の東福寺が引取り埋葬し、供養碑として「無量光佛」が昭和３６年８月に建立された。

また、昭和３９年４月には、元の場所から移して境木中学校前の坂道を１５０ｍ程下った左手に「投込塚之跡」碑が建立された。投げ込み塚周辺には、明治初期まで人家もなく、暗闇の中から鬼火が出るので、地元の人々はこれを恐れて寄りつかなかった。

## （５）東福寺（平戸町 299）

詳細は、特別編を参照ください。

## （６）光安寺と三末寺（平戸町 392）

光安寺

国道一号線をはさみ東福寺の向かい側にあるのが、天龍山光安寺（浄土宗）である。本尊は阿弥陀如来（源信作と伝わる）で、天正１８年(1590)に存公上人が開基、創建した。存公上人がこの平戸の地に仏縁を得て、お念仏の種を蒔いたことが、現在まで受け継がれていることになる。光安寺は植松寺、光照院、地蔵院の三末寺を有していたが、時代の趨勢の中でいずれも光安寺に統合され、廃寺となった。

植松寺は源頼朝の妻尼将軍北条政子由縁の寺とされている。本尊は観音菩薩で尼将軍北条政子の守り本尊である。当時鎌倉は戦乱のため神社やお寺はことごとく焼失する状況であったため、難を逃れるためにこの地に観音菩薩を安置したものである。

光照院は永谷の「えんま様」として地域の人々に親しまれていた。北条氏第五代北条氏直(1562～1592)が当地で戦死した敵方武将の首を軍門にさらし、これを裏山に合葬し塚とした（首塚）。塚に埋められた亡魂は毎夜哀しみ痛みの声をあげていた。当地を訪れた江戸の霊巌上人の門弟・浄見上人がこれを知りこの地に留まり供養を行った。さらに師の霊巌上人の来臨を懇請し、鎮魂の別行を行ったところ、亡魂の声は治まったという。浄見上人はこの地に寺を建立し、戦禍に倒れた武将の鎮魂と平和安穏を祈願した。霊巌上人を開山とし自らは第二世となった。

地蔵院は、昭和３０年代に不審火によって堂宇が焼失し、本尊の地蔵菩薩はじめすべてが灰となったため、詳細は不明であるが、相州鎌倉郡永谷村「金谷山地蔵院」と名を残している。植松寺と同様に環状二号線建設用地となり、境内地すべて道路用地に提供した。

## （７）源頼朝の白旗神社（平戸町 302）

白旗神社(平戸)

国道一号線の平戸交差点そばに鬱蒼と茂った小高い森があり、石段を上ると平戸の鎮守白旗神社がある。永谷山東福寺の所蔵文書によると、白旗大明神（白旗神社）は、乾元元年(1302)９月鎌倉鶴岡八幡宮別当相承院の元智（のちの智円）が勧請（神仏の分霊を請じ迎え祀ること）したものである。

白旗神社を勧請した智円(1285～1366)は相承院

七世として３４年間相承院に奉供した。相承院２４世密信が東福寺慶巌和尚の所望によって頼朝公の御遺髪を白旗大明神（白旗神社）のご神体として送ることができたのは、相承院が御遺髪を安置してある法華堂の管理をまかされていたことに因る。

頼朝公の御遺髪を安置しているのは、愛知県の滝山寺境内の「惣持禅院」と神社としては白旗神社のみである。ちなみに相承院は明治元年(1868)の神仏分離令・廃仏毀釈で多くの宝物を失い、廃寺となって現存していない。

## ２．東戸塚地区

### （１）北天院と佛光國師と新見家（品濃町 1705-1）

品濃町にある北天院は鎌倉時代上期からこの地にあると言われていますが、この寺の由来について前住職桜井一溪和尚がいくつか資料を残されていますので、その一部を抜粋し紹介させていただきます。

北天院

所在地　横浜市戸塚区品濃町 1705 番 1

山号　品濃山
寺号　北天院
開基　禅興明林玉和尚
開山　勅諡佛光圓満常照國師無覺祖元禅師
本尊　釋迦牟尼佛
　　安永８年、大仏師、源光作
宗旨　臨済宗
本山　鎌倉　圓覺寺
住職　第２５世　櫻井宗優

佛光國師　草履ぬぎの碑

北天院の創立年代は不明ですが、「佛光國師草履ぬぎの古道場」として言い伝えられていることから、遠く鎌倉時代上期より存在していたようです。

本山圓覺寺の開山様である佛光國師を請して、北天院の勧請開山とし、それ

以来時代の変遷により、寺門の隆衰は免れられませんでしたが現在に至っています。

北天院　全景絵図

しかし、昭和４８年に、日本国有鉄道（現ＪＲ）東海道本線増線工事の為、北天院墓地を総移転しなければならなくなり、その代替地を境内地に選びました。ところが、建築以来既に２００有余年の歳月と加えて、関東大震災の被害の為、諸堂宇の破損が甚だしく、到底裏山に移築するに耐えられない状態であったため、やむなく新たに再建築したもので、新築した建築物は、本堂、開山堂、書院、寺務所、庫裡、山門、正守観音堂で、鐘楼のみは移築したものであります。

佛光國師は明の生まれで１３歳の時、父が死去したため、１４歳で出家し、径山の佛鑑禅師の弟子となり修行の道に入り各地で修行し、大悲寺の大観禅師のもとで悟りを開かれました。それが３０歳の時でした。

佛光國師が天童山景徳寺にいた時、日本の北条時宗公は大覚禅師が死去されたので至元１６年(1279)に、國師に日本への招請を願い出たところ、國師はこれを受諾、國師５４歳、時宗２９歳の時でした。

さっそく建長寺の住持になり、仏法興隆の為、活動されました。弘安５年(1282)１２月の圓覺寺の落慶法要には開山禅師として入寺されましたが、この時の法語に「一弾指間に華厳法界を涌出す」の一節があります。これは『この

地に華厳円融の平和な世界を現出することが本願である』ということで、國師がいかに平和を願っていたかを知る事ができます。

國師は２～３年で中国へ帰るつもりでしたが、時宗公の深い帰依を受けたので、一生日本にとどまりました。弘安９年(1286)９月、建長寺に於いて、６１歳の生涯を閉じました。墓は圓覺寺舎利殿の上の所にあります。

建武元年(1334)８月、足利直義が、この地を鎌倉建長寺正續院に寺領として寄進しました。秋庭郷は、現在の秋葉町、名瀬町、品濃町を指しますが、建武の頃は上杉氏の領地で、至徳元年(1384)７月後亀山天皇が、勅を発し当地を圓覺寺祖塔正續院に寺領として寄進されました。(略)

尚、寛永１０年(1633)頃の圓覺寺末寺帳に直末１０ヶ寺の一つに挙げられています。圓覺寺派として、末寺で御本山の開山様を迎えて開山となった寺は、この北天院だけであって、想うに当地区が本山開山照堂の寺領であった事と併せて、古老の言い伝えにも残されています。

佛光國師が北条時宗の拝請により遠く中国より渡来された途中、江戸湾に上陸し、現在の神奈川台を経て鎌倉に通ずる道すがら、品濃村を通過した際、たまたま一軒の草庵（当山）に足を止められ、衣替えをして鎌倉入りを果たされたそうです。(略)

本山圓覺寺派管長、朝比奈宗源老大師が特に筆をとられて、昭和５１年１１月　＝　佛光國師草履ぬぎの古道場　＝　と誌されて、記念碑を建立しました。

新見彦左衛門正勝は、天正９年(1581)より縁あって品濃村に住み、その墓所は品濃町氏神、白旗神社の傍にありました（今は谷宿公園の南側の集合墓地にあります)。

天正１２年(1584)、新見正勝は長久手の役に従軍し、名ある武将の首級をあげて軍功を顕しました。その後尾州小幡城を守備し、戦乱が治まると再び品濃村に戻りました。正勝の母は、家康のご意見番、大久保彦左衛門の娘であることは有名です。

正勝は寛永１９年(1642)に亡くなり、その子孫、伊賀之守正路は、文政１２年(1829)頃、大坂西奉行となり、宇治川を利用して河口に巨船の出入りを行わせる等、特に水運を活用して大いに功績を挙げたそうであります。

新見の殿様の墓標

西御丸小納戸役三浦義韶の子として生まれた正興は、新見正路の養子になり、安政６年(1859)１０月、外国奉行となり、幕府が米国と通商条約を結ぶ際、我が国最初の全権大使、遣外使節の重任を負い、副使として村垣淡路之守範正、目付小栗豊後之守忠順等を従え蔓延元年(1860)正月、米国船ポーハタン号に乗り組み、サンフランシスコに渡りました。

幕府軍艦咸臨丸が、随行艦として、軍艦奉行木村摂津之守、勝海舟等に率いられて太平洋を横断したのもこの時でありました。

新見正興は無事その大任を果たした事は勿論ですが、この新見家は代々北天院の大檀那の外護者であり、新見家に係る古文書等多数保存しております。

## （２）日本最古の現役トンネル

鉄道発祥の地、横浜には建設から１００年以上経た現役最古の鉄道トンネルがある。東戸塚と保土ヶ谷区境木町にかけての「清水谷戸隧道」で今も現役として活躍している。

清水谷戸トンネル

明治２０年(1887)、工部省鉄道局によって全国で１７番目に造られたトンネルは、現在も東海道上り線で使われている。総工費は約５５，０００円。当時は一円でかけ蕎麦が１００杯食べられた時代である。小学校教員の初任給は８円だった。

明治３１年(1898)の複線化に伴い、下り線のトンネルが増えた。形状が微妙に異なり、カマボコ型アーチをした上り線の方が、タマゴ型の下り線に比べて少し背が低い。トンネルの側壁部は当初煉瓦造りだったが、大正１４年(1925)の電化工事でコンクリート造りに改築された。２年に一度のメンテナンスは通常のトンネルと同様に行われている。２０年に一度の大規模調整は平成１３年に行われて現在に至っている。

場所は東戸塚駅下車徒歩１０分、東口から保土ヶ谷方面に線路沿いに進んだのち、地下道をくぐり線路沿いをさらに進んだところにある。

## （３）品濃一里塚

江戸日本橋から９番目（約３６km）のもので、保土ヶ谷町の一里塚と戸塚吉田町の一里塚（ともに跡のみ）の中間にあたり、昔は大きな榎があったと伝えられているが今は楠やタブの木、中心にはその榎の根本が残っている。県内でほぼ完全な形で残る唯一の遺跡として極めて貴重なものであり、昭和４０年７月１９日に県史跡として指定された。平戸側は公園になっている。

品濃一里塚の道標

一里塚は、江戸幕府が東海道・中山道・奥州街道などの街道を整備するために、慶長９年(1604)２月に大久保石見守を工事の総奉行に任命し、８年の歳月を要して構築させたものである。江戸日本橋を起点とする１里（約４km）ごと

に街道の付属設備として、道の両側に造られ、遠くからも見えるように塚の上に榎や松が植えられ、旅人は木陰を休息所としていた。また、駕籠賃などを計算する基準となり旅人は距離を知るための目安となった。塚の大きさは５間（約９ｍ）四方で、高さは一丈（約３ｍ）が基準という。

一里塚の近くに、「下馬薬師」の異名をとった薬師堂があったといわれている。この薬師堂は、通行する馬が薬師を恐れて暴れるため、落馬事故が絶えずいつしか東福寺に移されたという。

### （４）源義経の白旗神社（品濃町 518）

白旗神社は源氏の武将が祀られる社として知られるが、当地域には平戸と品濃の２つの白旗神社がある。前者は頼朝公、そしてこちらは義経公を祀っている。全国の８０余社の白旗神社でも、義経公を祀るのは八社と珍しいが由緒は不明である。

白旗神社（品濃）

創建は康元元年(1256)、社殿は天正３年(1575)、天保１１年(1840)にそれぞれ改築された。関東大震災の際には、御社殿が倒壊したが氏子には被害がなく、当時の部落長は「宮柱うちくだけても倒れても氏子に怪我のなきぞ尊き」と献詠し、村人たちは鎮守様が身代わりになってくださったと感激して、翌年再建に着工、９月２８日に竣工し、この日にちなんで例祭が行われるようになった。その後、戦後から現代に至るまで町を見守ってきた御社殿も平成１９年に不審火により消失するも氏子への被害はなく、平成２４年に氏子の尽力により御社殿が再建された。

### （５）武蔵と相模の国境の道

東戸塚は、旧東海道の武蔵国と相模国の国境に位置する。この国境に沿って古道が通っていて、そのほとんどが山の尾根道だったせいもあり、今でもところどころに当時の跡が残っている。明治１９年(1886)～２３年(1890)の間に道路敷地、並木敷地払い下げなどにより路幅が半減され、鬱蒼とした松並木は切り倒されたが、この辺は起伏が激しかったこともあり、わずかであるが古道を感じる場所が点在している。

ＪＲトンネル上を通る辺りの幅２～３ｍの道は、両側を緑の木立と緑地に囲まれており昔日の面影が偲ばれる。

### （６）熊野神社（川上町 318）

熊野神社は平安時代の天長６年(830)川上町後山田字番匠給（現在の品濃町との境付近）に地域住民の守護神として創建された。

祭神は伊弉諾尊（いざなぎのみこと）・伊弉冉尊（いざなみのみこと）で祭礼は毎年１１月２３日に行われてきた。

明治２９年(1896)東海道線複線化に伴い、境内の一部が鉄道用地となったため、明治３０年(1897)４月１２日後山田村ほぼ中央の現在地に移転し、祭礼もそれ以来毎年４月１２日に行うようになった。現在の社は、平成５年不審火により焼失したため、耐火構造の豪奢な社殿となった。総工費６，６１６万円であった。

川上町熊野神社

川上町熊野神社入口

境内には古碑群があり、右二俣川道、左大山道と記された道標を兼ねた地神塔［文政３年庚申塔（元禄４年と元禄７年)］、双体道祖神（宝暦１３年)、石宮３基のほか五輪塔、宝篋印塔（ほうきょういんとう）の残欠があり、いずれも近くの古道から移されたものであり、この地域の中世以来の古い歴史を物語っている。

## （７）徳翁寺（川上町 546）

乗國山徳翁寺は曹洞宗の寺で、大本山総持寺（横浜市鶴見区）の御直末である。「御直末」とは大本山から直接分かれた寺ということで、明治以前は「御直末」である寺々の住職の中から輪番制（優れた方が順番に）で大本山の禅師（貫主）の地位に着き、大本山を護り、天下に号令する資格を有する「寺格」を表したもので、今でも自ら「御」をつけて呼ぶ習わしで、大本山に於いても特別の待遇をされている。

永正時代(1501～1510)現在の川上町あたり一帯は鎌倉管理領であり、上杉輝虎（謙信）の曾伯父である刑部太夫乗國郷の子、憲方が父の菩提を弔う為、観音大士霊像を本尊とした寺を創設し、如幻宗吾（にょげんそうご）禅師を招き、大永元年(1521)開山した。

徳翁寺本堂

徳翁寺山門

如幻宗吾は尾張国（愛知県）出身で、諸国遊学の後、能登国大本山総持寺（石川県輪島市、明治３１年火災により焼失後大本山を横浜市に移した）に至り、重職である「蔵司（くらのつかさ）」となり、その後武蔵、相模国で布教活動に努めていた。

刑部太夫乗國郷の遺骨は、徳翁寺の山門前の丘の上に埋設され、寛政２年(1790)建立の開基塔として残されている。

本堂は大正１２年(1923)関東大震災により大破し、昭和７年に３３世百川文雄大和尚の代に新本堂が落慶した。また寺院付近の開発と共に、昭和６２年白亜の観音像がそびえるつばき霊園が開園した。

つばき霊園　観音像

## ３．川上地区

### （１）蓮久寺（前田町 406）

日蓮宗の本能山と号し、身延山（山梨県）久遠寺の末寺であった。開山は日蓮聖人の直弟子最上院宗明日宗上人が草創したと伝えられているが、相模風土記には、「開山日厳（にちごん）、慶長１０年(1605)２月１０日」と記してあり、また当山過去帳によると、日宗上人は永仁３年(1295)寂と記されているので、日厳が中興開山（寂れた寺院を復興）したと思われる。安置されている四菩薩（上行、無辺行、浄行、安立行）も江戸時代初期の造立である。悪鬼であったがお釈迦様に子供と離ればなれになる悲しさを諭され、子供を守る善神となったと言い伝えられる「鬼子母神」が祭られ、子供が無事成長するようにと祈る信仰が生まれ、現在も子育て、安産、所願成就を祈る参詣が多い。

蓮久寺本堂

日誠上人の墓碑

本堂は文化１０年(1813)に第２４世日誠上人の時に建立され、欅の柱、草ぶき屋根であったと記されている。日誠上人は寺小屋を開き、前山田村（現前田町）をはじめ近在の子供達が学びに通った。境内には文政１２年建立の墓碑があり、教え子であった筆子の名前が前山田村、平戸村、品濃村、舞岡村など村

別に数十名記されている。本堂は、大正１２年(1923)の関東大震災で倒壊したが昭和９年旧本堂が当時の金額６，５６０円の寄付により再建され、第二次大戦中は疎開児童の宿舎としても使われた。平成１９年日厳上人中興開山４００年記念事業として、欅造りの現在の本堂が完成した。

現住職第３４世鈴木浄元氏は、世界三大荒行の一つと言われる日蓮宗１００日大荒行を成し遂げ、木剱相承(木剱は仏具であり、それを使用し、祈祷を行うこと)を許された僧侶であるが、長年民生委員、教誨師を務め、現在は保護司として活躍されている。

旧川上小学校の第３代三橋校長および難波副校長の墓所があることでも知られている。

## （２）日枝神社（前田町 216）

平安時代天長元年(842)当地の開拓に従った人々が相談し、地相を見て創建し、その後人々のくらしも豊かになり、月々の神事を怠らなかったと伝わる。

大山咋命を祀った古い神社である。

現在の社の創建は明確になっていないが、平成４年奥殿新築と共に改築された。東海道線近くの、小高い丘の中腹に大型マンションを背に、横浜市が名木古木に指定している、直径１ｍ以上の欅３本を含め、うっそうとした木立の中に鎮座している。

この地に住む人々の健康と家内安全・子孫繁栄をお守りする神として、初詣には６００人余の人々が訪れ、甘酒及びお神酒を振舞っている。毎年例祭を４月９日、新嘗祭を１２月８日に催している。

日枝神社本殿

直径１ｍを超える欅

## （３）長蔵寺（秋葉町 348）

八正山と号し、本尊は薬師如来で、天文３年(1534)法印愛賢が開基、創建した。明治政府の廃仏毀釈(明治維新政府の神道国教化政策に基づく仏教の排斥運動)の影響により衰微し、代々住職不在となり、大正１２年(1923)関東大震災により本堂が倒壊した。昭和１７年本橋寛信氏が住職を拝命し、入山する。その後檀信徒の協力により、昭和３５年本堂を再建し、平成２０年本堂改築し、現在に至る。

境内には、寺子屋師匠 成弁の筆子塚［貞亨３年(1686)建立］、真長の筆子塚

［宝暦３年(1753)建立］があり、先住が寺小屋を開いていた証しである。また元文５年(1740)建立の地蔵像と昭和２９年建立の秋葉井堰改造工事を記念する吉田茂元首相筆(号青涯)の治水之碑がある。

長蔵寺本堂

本山に隣接し、川上地区初めての幼稚園「学校法人秋葉幼稚園」を昭和２９年に開園し、この地域の幼児教育に貢献している。

### （４）増威八幡社（秋葉町 343）

源義家が東征の折に立ち寄られ神社名を問われたが、神職が自分の名前「増井」を答えたところ、「威を増すとは幸先が良い」と喜んだと伝えられ、それが神社名になったのか定かではないが、覆い屋に掛かる扁額には「増威社」の社号がある。また旅の僧が一夜海中に光るものがあり、取り上げて見ると香木の像八体と宝物を入れた小祠であった。直ちに当社に納めたが、米の無い時期であり、やむなく小麦を蒸して奉納した。故に当社は別名「小麦八幡」と言われる。

増威八幡社本殿

お祭りの様子

祭神は品陀別命（品陀別命）であり、総本社は宇佐八幡宮(大分県宇佐市)である
祭礼は７月２５日、新嘗祭は１１月２５日に催される。

## ４．柏尾地区

### （１）鎌倉ハムの由来（柏尾町 183）

明治の初め、英国人のコック長ウイリアム・カーティスが居留地から乗馬にてたびたび戸塚宿を訪れていたが、柏尾の地でハムの製造とホテル業を始めた。

今も残る赤レンガ倉庫

当時、農業関連の特徴を生かした工業化を模索していた下柏尾村（柏尾町）の村長齋藤満平は、相当の権利金を払いハム製造法を入手した。またカーティスのハム生産に関係していた齋藤角次、益田直蔵もそれぞれ試作を試みていた。

こんなこともあり柏尾の村をあげてハム造りに取り組んだ。本格的工業化を図ったハム生産は柏尾が国内初で明治２０年(1887)であった。その後、品質の向上に努め、明治３１年(1898)帝国海軍に遠洋航海用貯蔵食料品として試され良好な評価を得た。また、明治３５年（1902)には、米国セントルイス万国大博覧会に出品し、見事銀賞を受賞した。

帝国海軍への正式入札の時、満平は品名を「ハム」としたが､固有名詞が必要との指摘を受け、即座に鎌倉郡柏尾で生産しているので土地の名を付けて「鎌倉ハム」としたのが名称の由来と言われている。

満平、直蔵、角次の３人の合同作とそれを支えた村民があったればこその快挙であるとし、各々の名称を付けることをやめ､そのまま「鎌倉ハム」とし、変更しないこととした。また、需要の拡大に応じるため藤岡商会（のちの岡部商会）が設立され村を挙げての取り組みとなった。

鎌倉ハムの製造

今も現存している日本初のハム生産のシンボルを表す赤レンガ建物は、横浜港にある赤レンガ倉庫とほぼ同じ形式で１階部は明治末の建築で、２階モルタル部は大正６年(1917)に増築されたものである。(壁の厚さは約１ｍ、壁が厚いことによる洞穴のような冷感の利用が目的)。

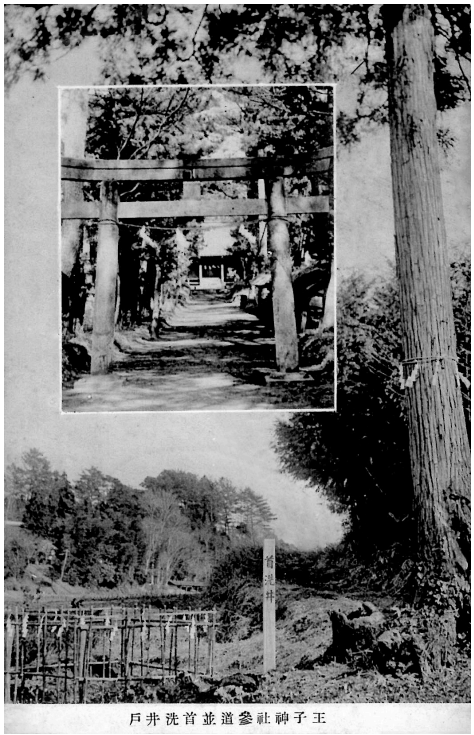
当時ハム製造は、夏場は肉等の腐敗のため不向きであったが、年間を通し製造するための冷蔵庫兼､現代流で言えば空調設備付工場が必須だった。国内のハム生産に当たり、３人が力を合わせ製造法の確立を図り、販売に関しては多くの困難を乗り越え拡大に努め、その後のハム需要増に対しては、いち早く３人以外の柏尾の人々が生産体制を立ち上げ、ハム市場８０％のシェアを確保したことは柏尾の誇りである。

## （２） 王子神社と護良親王（柏尾町 939）

鎌倉政権は北条高時が権力を握っていた時代である。高時は、政治に不熱心で遊興にふけり仕事は部下に任せきりだった。そのために幕府のモラルは低下し、その権威と実力は失われていった。

一方、後醍醐天皇は勤勉家で、学問的確信から「君主の徳を持ってする親政が万民を救う」と言う信念から、密かに幕府打倒を画策していた。

後醍醐天皇の皇子の護良親王も父君に劣らぬ倒幕論者であり、豪族の楠木正成や北条家に恨みを持つ足利尊氏や新田義貞等と反幕府軍を結成し、各地で幕府軍との間に激戦を繰り広げ内乱状態を作り、ついに鎌倉に突入し激戦の末北条軍を追い詰め北条幕府を滅亡させた。



「建武中興６００年祭」絵葉書より

こうして、王政復古を成し遂げた後醍醐天皇は、武家政治を一掃し全権を掌握し１３３４年、年号を建武と改め新政権を誕生させた。しかし、同盟の足利尊氏は北条氏に代わって天下統一という足利家先祖伝来の野望を実現させようとその勢力を拡大して行った。この動きを察知した護良親王は、北条氏が滅び後醍醐天皇の親政を活性化させるためには、足利尊氏の排除が必要と感じて、集兵し尊氏との対立を表面化して行った。

この危機を感じた尊氏は天皇に、親王のよからぬ話を讒言したことから、天皇は親王を流罪として鎌倉に送ってしまった。そのころ鎌倉を実効支配していた尊氏の弟直義も、日頃の恨みを晴らそうと親王を鎌倉二階堂の東光寺の土牢に幽閉してしまった。

その後、建武の中興と呼ばれた後醍醐天皇の行政も行詰り失敗の様相を呈し、幕府政治の復興を望む声が蔓延し始めた。建武２年(1335)北条高時の遺児時行が中心となり政権奪回を目指して鎌倉を侵攻した、直義も応戦したが大敗を喫し鎌倉を放棄して西走する際７月２３日に親王の身柄が北条氏の手に渡るのを恐れ、部下の淵野辺義博に命じ親王を殺害させてしまった。

殺害され放置された親王の御首級を愛妾「南のお方（雛鶴姫）」が拾って葬ったと言われている。

雛鶴姫が鎌倉から京へ逃げる途中に王子神社（柏尾町）の井戸で御首級を清めたと言われており現在「首洗い井戸」としてその名残を残している。

御首級は本殿の床下に葬られたとの伝承から、王子神社と護良親王は造詣が深い神社として祀られている。

## （３）益田家のモチノキ（柏尾町 1005）

旧東海道の戸塚へ向かう不動坂の手前左側に樹高１９メートルにも及ぶ２本の「益田家のモチノキ」が聳えている。想定樹齢３００年のこの大木は江戸時代からこの東海道の移り変わりを見てきている。もしこの大木が言葉を話せるなら、この１００年の歴史をどのように語るのであろうか？この大木は江戸時代の参勤交代を見、明治維新の激動を経て、関東大地震の大災害や太平洋戦争の空襲にも負けず現在まで生き延びてきている。

移設中の益田家のモチノキ

昭和５６年に神奈川県の指定天然記念物として指定され地域で大切に見守ってきたが、近年所有者が替わったことで、平成２９年２月に一部が無許可で伐採されるという事態が発生した。その後、何とかそれ以上の伐採を防ぎ、写真のように擁壁で保護することになったが、往時の樹勢はなく、枝葉もまばらとなり、存続が危ぶまれる昨今である。

### （４）成正寺（柏尾町 1221）

成正寺の開基は、鎌倉時代、貞応元年(1222)夏の頃、当所領主齋藤武蔵守秀周（ひでちか）の兄、齋藤兵部尉入道成正の願いにより、伯父にあたる法印海順大阿闍梨を招き、聖徳太子ご自作の１６歳守屋退治の尊像を守り、また入道成正の守り本尊である『薬師如来』をご本尊として、「天台宗柏尾山法萬寺」と号した。

阿弥陀如来立像

開基海順は寿永２年(1183)１１歳の時江戸麻布山にのぼり了海上人の許、出家得度し、その後１７歳の時、京都比叡山に上った。

第十五世覚順の代、浄土真宗本願寺の第八代蓮如上人関東へ下った折、そのご教化を蒙り、速やかに浄土の真門に帰依した。その為、天台宗を改め浄土真宗に改宗した。上人より、「東谷山」と山号を下され、又、法萬寺建立の人齋藤入道成正の名をとり「東谷山成正寺」と賜り、ご本尊を「阿弥陀如来像」に改めた。覚順を中興の祖とし「浄土真宗成正寺」の開祖とする。

昭和３７年、二十八世釋義雄師、本堂を、１０年後、庫裡及鐘楼を、さらに昭和６３年本堂増改築し、現在に至る。

### （５）大山不動尊（横浜市地域史蹟・柏尾の大山道道標）（柏尾町 486）

伊勢原市大山には大山阿夫利神社があり、江戸時代から広く関東一円の人々に信仰されていた。

参拝者は、旧東海道から「大山街道（柏尾道）」を利用して伊勢原に入り、大山参拝に向かった。この旧東海道から大山街道への入口が柏尾町であり、大山詣での参拝者の安全と無事を祈願するため現在の追分不動尊が建立された。

柏尾大山不動尊

柏尾の人達も、雨乞いを祈願するため大山に参拝するのが、恒例となっており現在も継続されている。柏尾の歴史的文化の伝統を将来に残すために、毎年７月２７日に祭礼を行っている。このような柏尾追分不動尊と大山道道標の歴史と伝統は、横浜市地域史蹟に指定されている。

## （６）供養塚の由来（柏尾町 757 県営柏陽台アパート内）

供養塚

柏尾町の県営柏陽台アパートの外れにある緑地帯の小高い丘の頂上に写真の「供養塚」があるのをご存知だろうか？この供養塚の由来について昭和６３年に発行された柏尾小学校創立２０年記念「かしおのながれ」に解説があるので抜粋する。

「明治４１年に川上村下柏尾の人たちが供養碑をたてました。それには『松枯れて名のみ残れる供養塚』の句がほられています。松を供養するためにたてたのでしょう。この松は大人が６、７人手を広げてかかえるほど大きくりっぱで、太陽にあたって枝のかげは不動坂あたりまでのびていたそうです。農作業がひまになると人々はこの松にのぼり、海をながめたり、遊んだりしてつかれをいやし、時には枝を切ってまきにしたとも言われます。

…今から約７６０年前柏尾山法萬寺(はくびざんほうまんじ)(今の成正寺）というお寺ができました。…その法萬寺をたてたとき鐘を作ったところが供養塚の場所」と言われ、記念に松を植樹したとも、鐘が盗まれたため鐘を供養する意味で松を植えたとも言われています。

## （７）小石川家の土蔵（柏尾町 544）

小石川家の土蔵

小石川家は江戸時代に柏尾に住み、幕末の頃に東海道沿いで宿屋を始め、その頃から「追分の石川屋」の屋号で呼ばれた。「追分」の呼び名は、この場所から大山阿夫利神社への道、すなわち大山道が始まる分岐点にあることから来ている。

明治に入ると現在の柏陽台など近隣に所有していた山林から伐り出した木でまきや炭を焼いて売る燃料商に転じ先々代まで続いた。

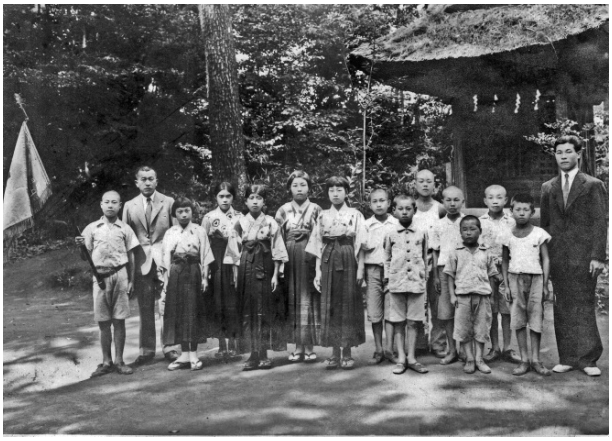
平成２５年、国道１号線の拡張工事に伴い母屋は解体されたが、国道を挟んで向かいに建つ土蔵は当面残されるとの事である。

## （８）御嶽神社（上柏尾町 249）

【由　緒】　建仁２年(1202)に日本武尊の御功績を追慕して創建されたと伝えられる。始めは石造りの祠(ほこら)であったが、文化年間(1804～16)に、有志が協力

して現在地に御社殿を再建、上柏尾の鎮守として鎮座している。その後、長きに渡り世の変遷を乗り越え、氏子始め、世話人・総代、役員など人々の尽力に依(よ)り、昭和４８年９月９日に御社殿を造営、平成２０年７月に拝殿を造営し、現在に至る。

【祭　事】大例祭
　　毎年１０月１日午前斎行
【年行事】☆元旦祭　正月元旦午前
　　☆柴燈焼(さいとうやき)(ドンド焼)
　　１月１４日午前中


昭和６年当時の御獄神社前の子ども達

## （９）そとごう遺跡（上柏尾町 52x～53x 付近）

そとごう遺跡の航空写真

赤関橋から南東の林の宅地造成で「そとごう遺跡」が発見され、昭和４０年代に調査が行われました。そとごうの集落は標高４０．５ｍのところに位置しており、谷あいには清水が湧き出て、暖かな場所であったようです。ここで縄文中期(BC2500 年頃)勝坂式土器、後の加曽利Ｅ式土器も出土しました。

土器片のほか石鏃(いしやじり)、石槍、石斧、石皿などの石器が出土しています。

加曽利Ｅ式土器

住居跡２軒と埋甕(かめ)が２ヵ所で発見され長径６．６ｍ、短径６ｍの不整円形で中央に炉がつくられていました。この時代は海岸が近くにあったので貝（ハマグリやアサリ)や魚、山野には鹿やいのしし、栗や胡桃、どんぐりも有り、芋、たけのこ等を主食にしていたのではないでしょうか。石槍は黒曜石のものも使用されていて、足柄の湯河原で採掘されたものを物々交換によって、得ていたのではないかとおもわれます。１段低いところに小規模の貝塚があったようです。

また「そとごう遺跡」の特徴は、環濠集落があったことです。環濠の南端に３基の方形周溝墓が発見されていますが、弥生中期(宮ノ台期)から後期(久ヶ原期)に築かれたものと推定されています。その環濠の中には竪穴式住居跡が多数見つかっています。久ヶ原期１００年ごろに、大地震が起こりました。その結果海岸が遠のいて、海水が退いた跡地に、清水の湧く「そとごう」の中から、水田で稲作や斜面を利用して畑作に従事する人たちも出てきたようです。

### （１０）赤関橋と岩下染色水洗工場（上柏尾町 490 付近）

赤関地帯は毎年のように９月の二百十日の頃の台風時は、柏尾川の水が氾濫し床上浸水もあつた。水田の用水堰が昔からあって今のブリヂストン工場までの水田を潤した。水害を防ぐため深夜の豪雨中、堰を取り払いに行き流れに巻き込まれ亡くなった方もいたようである。今は河川工事がはかどり、水害は解消されたが昔は赤関居住者の最大の不安の一つだった。水が氾濫して別の道を通ったことも多かったようである。

昭和３０年頃の赤関橋

また赤関橋付近の柏尾川は、捺染工揚から出される絹製品が川面にさらされていた。目に映る色とりどりのネッカチーフは清らかな水流に洗われていた。特に冬の最中、腰まである長靴を履いて、染料を洗い流すための作業を行っていた。黙々と作業する光景は、水は冷たく大変だと思いながら、厳しい冬の風物であった。

工場内では、大きなローラが回転しておりネッカチーフは蒸気の中を流れていた。ネッカチーフの縁は、ご婦人たちが器用に丸めて仕上げ、製品となって出荷されていた。横浜の地は桑畑が多く散在していたため、養蚕が盛んに行われていた。

以上は「柏尾の１００年史」より引用・抜粋しました。

## ５．舞岡地区

### 舞岡の地名の由来

かつて、鎌倉郡舞岡村で明治２２年(1889)に、上柏尾・下柏尾・前山田・後山田（うしろやまだ）・品濃・平戸の各村及び永谷村飛び地と合併し川上村となる。

昭和１４年４月１日に横浜市戸塚区に編入され、戸塚区舞岡町となる。

地名の由来ははっきりしていないが、古くは前岡村（まえおかむら）、腰村（こしむら）と呼ばれていた。

引用：舞岡町ネット情報

### （１）郷土の歴史に詳しい圓福寺（えんふくじ）住職からの口述史実

「新編相模国風土記稿第４・５巻 雄山閣版」明治１７年(1884)に記載、古くは前岡村（まえおかむら）と書かれています。それ以前は腰村と言われていたようである。しかし、腰村を裏付ける物的証拠は残っていない。

腰村　　前岡村（白旗伝説では舞岡村にあらためた）乾元（けんげん）元年(1302)頃、舞岡兵衛（ひょうえ）（三浦氏一族）（本名は土屋右衛尉義則（つちやひょうえじょうよしのり））が、舞岡郷を根拠地として

舞岡氏を号としていた。

前岡村　鎌倉道の道標を兼ねた舞岡町と小菅ヶ谷町の境にある路傍の古い庚申塔(こうしんとう)に前岡村の７人が建立したとの文字が刻まれている。
時は江戸中期元文(げんぶん)２年(1737)である。

舞岡のシンボル、スダジイ椎の木に鎮座していた舞岡町と、小菅ヶ谷町の境にあった庚申塔

平成２３年７月４日、戸塚区役所は、地域団体「舞岡まちづくり塾」の要望を受け、舞岡公園南門近くの庚申塔を”地域文化財”にと横浜市教育委員会に推薦をする。

庚申塔は農村で流行した庚申塔信仰から、道標を兼ね江戸時代の元文(げんぶん)２年(1737)舞岡村の信者により建てられたもの。正面に「前岡村同行七人」、右側面に「これよりぐめうじミち」 左側面に「これよりかまくらミち」と刻まれている。同団体によれば現在の舞岡は昔「前岡」と呼ばれていたことを裏付ける地元に残された唯一の証である。

ご尽力の福田(左)島谷(右)両氏

庚申塔は、前年７月まで、現在地から 約８０ｍ離れた場所に生えていた樹齢約２６０年の大木のスダジイ椎の木の根元に置かれていたが、都市計画道路「横浜藤沢線」の着工を機に木と共に現在の場所に移された。

*スダジイとは「素台木」を語源とし、シイタケ造りの基礎となる原木なる台木

引用：２０１１年７月２１日タウンニュース

## （２）舞岡の最古の寺「東光寺(とうこうじ)」

東光禅寺は舞岡八幡宮の前の道路を８０ｍ歩いた右手の崖にあって「新編相模国風土記稿」に“東光寺 光西山と號す” “長福寺末” ”本尊は薬師如来(やくしにょらい)身の丈３寸(すん)２分(ぶ)(約10cm)大仏師　運慶作”と記述がある。

創建はいつ頃か定かでないが、現在残されている石仏を観ると一番古いのは江戸時代初期寛文(かんぶん)１２年(1661～1672)である。

明治の初め頃には尼さんが居たらしいが、いつしか廃寺となり、その後は上分(かみぶん)

４６軒の集会所などに使われていたという。しかし、老朽化が激しく維持できなくなり、地所を売却し、昭和５４年に金子政也氏が所有している「いこいの家」のそばに新しく薬師如来を祀る薬師堂を再建し、銅板葺きの２坪程の立派なお堂になった。

堂内正面にご本尊の薬師如来像を納めた小形の厨子と十二神将立像が安置され、参道には日光、月光の菩薩像などが並んでいる。

毎年１０月１２日午後２時より御開帳と法要が営まれる。御開帳の日には、地元の方は元より遠くからも参拝に来られ、地元の方々が手づくりの郷土料理を準備して参拝者に振舞っている。

取り壊される前の東光禅寺
（昭和５０年代初め）

鎌倉時代最高の大仏師運慶の薬師像が安置されているということは、舞岡地区にとって最高の史跡と言える。

薬師堂

大仏師運慶の薬師如来像、
十二神将が祀られている東光寺薬師堂

参道に並ぶ日光、月光の菩薩像

## （３）舞岡の歴史を刻む旧東光寺の梵鐘

神奈川中央交通バス舞岡営業所（所在地：舞岡町3511）前の道路向かいにある火の見櫓の鐘は、旧東光寺の梵鐘である。

寛政３年（1791）に鋳造。今はない舞岡東光寺の縁起が詳しく書かれてあり、同時に舞岡の歴史を知るのに極めて貴重な物である。４４８文字びっしりと鏨で刻まれており、銘文は当時の長福寺十三世住職陽山法韶が書いたものですが、かなり

難解な銘文で、又摩滅、傷もあり、今日では鋳造後２２７年の歳月が流れたことにより、解読困難な部分もある。鐘を鋳(い)た鋳物師は当時有名であった江戸の西村(にしむら)和泉守(いずみのかみ)とあり、口径３３ｃｍの半鐘(はんしょう)である。

半鐘

櫓の高さは７ｍ

戦時中には供出される予定で外され、そのままに難を逃れ戦後火の見櫓の鐘になったものである。

**鐘に鋳てある銘文**

・東光寺は長福寺の末寺で、本尊は運慶作の薬師如来(像高:三寸二分)である。
・そこ(宮脇谷)は鎌倉時代後期、鎌倉東慶寺開基の覚山尼草創の地である。
・元禄３年(1690)当時の庵主念昌と近藤氏が檀家の人達と協力して本尊の薬師如来を手入れし、新たに脇侍の日光・月光の両菩薩、十二神将の仏像を造立した。
・宝歴年間(1751～1763)に山が崩れ、寺の建物が倒壊し、長福寺住職梅岑は、薬師如来を泥の中から拾い出し、村の信者と一緒に仏像を補修し建物を再建した。
・その後、鐘が壊れたので庵主浄因と村の老若男女が浄財を出し合って寛政３年(1791)に鐘を再生した。その他、鐘の功徳や称賛の詩文が綿々と描かれている。

引用：平成２７年６月３０日発行　舞岡まちづくり塾長福田俊光

## （４）舞岡の心のふるさと舞岡八幡宮

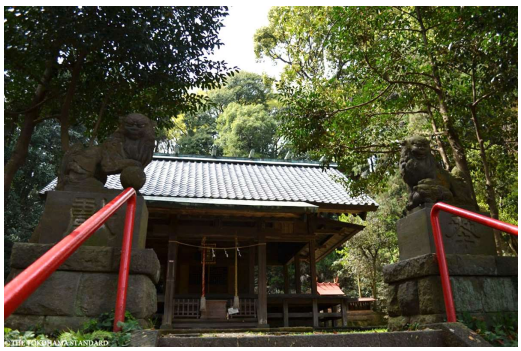
所在地:戸塚区舞岡町946

地下鉄ブルーライン「舞岡駅」下車、舞岡町「小川アメニティ」舞岡川に沿って上流へしばらく歩くと舞岡八幡宮の第一鳥居前に出る。

旧鎌倉道沿いにあったお宮の由来と創建は、今を去ること７１６年前の鎌倉時代の乾元(けんげん)元年(1302)源氏の白旗が空に舞い、これを吉兆として村名を腰村改

め“舞岡村“名の由来とされる。この際にあわせ京都石清水(いわしみず)八幡を勧請(かんじょう)し「舞岡八幡宮」が創建されたと伝えられている。

明治４１年(1908)には、村内にあった第六天社(大六天社)、若宮八満社、御嶽社を合祀して舞岡神社と改め、昭和４１年頃に旧来の社名であった舞岡八幡宮と改めた。現在の本宮は、明治４５年/大正元年(1912)に建立された。



毎年の例大祭

舞岡八幡宮は村の鎮守で、現在境内にあるイチョウの古木は横浜市名木古木に指定され樹齢２４０年である。

毎年４月１５日の例祭では、忌竹をめぐらし、中央の大釜で沸かした湯に笹の葉を浸し、神前で参詣人にまく年中行事「湯花神楽(ゆばなかぐら)」が奉納されている。

引用：神奈川県神社庁ＨＰ、とつか歴史ろまん

## （５）戸塚区に残る一つだけの行人塚(ぎょうにんづか)（南舞岡３丁目 19）

・行人塚とは、修行者の自埋入定(にゅうじょう)即成仏したと伝えられる塚

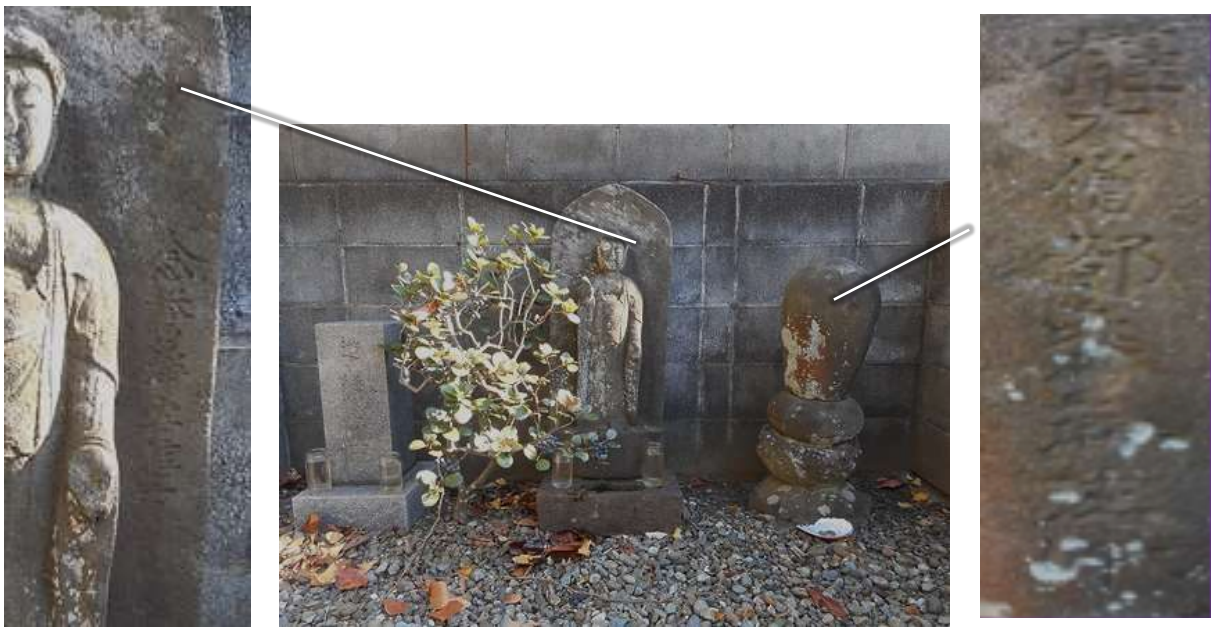
天保年間(1830～1843)発行の「新編相模国風土記稿」、塚五「上金塚、上銀塚、大判塚、鐘塚、行人塚」”縁故伝わらず”の記述があり、このうちの一つ行人塚のみ現在も残っている。

場所は、県立舞岡高校南側法地の一角に整備されている。これは舞岡台団地造成のために昭和４４年に広さ一坪足らずの所に移転されたとのことである。元あったところは不明であるが、広さは２５坪程であったようである。

この行人塚は墓石が２基あり、無終塔(印塔)であり、高さは７０ｃｍで元禄６年(1693)の年号と権大僧都(ごんのだいそうづ)・・・の文字が刻まれている。そして中央に高さ１ｍに

近い舟盤に如来像を石仏で夫妻の戒名が信士、信女の位号で刻まれている。

全国を修行して来た修行夫妻僧が舞岡に来て、やがて年老いて自分で穴を掘り夫婦が入り鉦をたたきながら往生したのを村人たちが哀れみ、手厚く弔った跡でそれが行人塚だとする古老の話である。



分区前の戸塚区で行人塚が残っているのは公田町（現栄区内）と舞岡の２ケ所だけであったとのこと。尚、左の遊逝信士と刻む墓石は、業者が昭和４４年に供養のために建立したと思われる。

＊権大僧都とは僧の位を示す

＊信士とは仏教の戒名（法名）

## （６）長泉寺の六地蔵（舞岡町 3492）

仏教には、すべての生命は六種の世界に生まれ変わりを繰り返すと言う六道輪廻の思想がある。この六道を六種の地蔵が救うという説から六地蔵菩薩が生まれたと言われている。六道とは天道・人間道・修羅道・畜生道・餓鬼道・地獄道と称することが多い。地蔵信仰は平安時代から始まる。

六地蔵

旅の修行僧「覚誉心」という人が建立したという。昔、元舞橋近くの舞岡川は深いよどみで、身投げをする者が多かった。それを憐れみ「覚誉心」が托鉢で浄財を集め、供養のための六地蔵を建立したとのこと。

＊覚誉とは戦国時代の大僧正

引用：平成２７年６月３０日発行　舞岡まちづくり塾長 福田俊光